

維新史回廊だより



第20号
2013年
9月発行
年2回発行

■編集 維新史回廊構想推進協議会
■発行 山口県総合企画部スポーツ・文化局文化振興課
(山口市滝町一一一TE) 〇八三一九三三一六一七)

維新史回廊だより第一〇号をお届けします。「山口移鎮」について、
山口市歴史民俗資料館の原崎洋祐学芸員に解説をお願いしました。

「山口移鎮」一五〇周年について

「山口移鎮」とは、文久三年（一八六二）に長州藩主毛利敬親が萩から山口へと政治の拠点を移し、翌年には上宇野令村の現県庁付近に「山口城（山口御屋形）」を築いた出来事を言います。城地と藩庁両方の移転を行つたこの事業は、いわば首都の移転とも言える大きな事業でした。本年はこの出来事からちょうど一五〇年の節目にあたります。ついでに「山口移鎮」について見てみたいと思います。

Q 「山口移鎮」が行われたのですか。

文久二年（一八六一）七月、「航海遼略策」によつて開国と公武合体を主張した長井雅樂が失脚し、長州藩は「破約攘夷」へと藩論を一転させました。京都では久坂玄瑞ら長州藩士や他藩の尊攘派志士たちが尊攘運動を展開し、三条実美らの公家と結んで幕府に對して攘夷決行を迫ります。そして文久三年四月、幕府は攘夷決行の期日を同年五月十日と定めたのでした。

こうして長州藩は攘夷決行へと突き進んでいきますが、「山口移鎮」はこのための準備の一環であったと言えます。攘夷を決行した場合、それに対する外国からの報復攻撃が予想されます。藩府である萩は海岸に近いため外国船からの攻撃を防ぐことが困難でした。したがつて、本拠地を沿海部から

内陸へと移す必要がありました。また防長両国は三方面を海に囲まれていますが、関門海峡付近や瀬戸内海方面の軍事指揮を萩から行うのは難しいという面もありました。そこで領国の中心付近であり、交通の利便性のある山口が移転先として挙げられました。

Q 「山口移鎮」の経過について教えてください。

文久二年七月に攘夷決行の方針を決めた長州藩は、さっそくその準備に取り掛かります。同年十月には藩役人や西洋城郭の研究家、砲術家に命じて事前調査に取り掛かりました。この事前調査は山口に城を構えるのにふさわしい場所はあるのか、またそれは何処なのかを調査するものでした。この調査の結果、上宇野令村付近が適地であるとされ、ついでに「八稜城」を築くのがよいとされました。「八稜城」とは八角形の西洋式城郭で、同じような西洋式城郭として函館の五稜郭が有名です。長州藩は攘夷実行にむけて大砲や軍艦などの洋式軍備を整えていましたが、「山口移鎮」においても西洋式城郭の築城を目指していました。

翌文久三年四月十六日、毛利敬親が山口中河原の御茶屋に入りました。日帰りの湯治を名目とした移動でしたが、実際には新城地の選定を目的としたものでした。翌十七日には藩重臣に城地の選定を命じています。新城の候補地は上宇野令村の他に宮野村も挙げられていましたが、幾度かの調査・協議を経て、文久三年七月十八日に上宇野令村の現県庁付近に決定し、七月二十日には「山口移鎮」が宣言されました。

なおこの間、攘夷期日の五月十日より長州藩は攘夷を決行し、六月一日に

はアメリカから、五日にはフランスから報復攻撃を受け大きな損害を受けます。これにより山口防衛が緊急の課題となり、小郡口や宮市口など山口諸口への閑門の建設が急がれました。



「山口領内絵図」（山口市歴史民俗資料館）

移鎮直後の山口周辺の絵図。閑門なども描かれている。

といふて「山口移鎮」に伴い、藩主の居住場所である御屋形や藩庁だけではなく、これに付随する官衙や勤務する役人の住居、あるいはその子弟が通う学校の設置などが必要となります。これらの計画は八月より漸次進み、十一月には山口の新たな都市計画が定まりました。そして翌元治元年（一八六四）一月十五日に地開きの儀式が行われ、三月には地鎮祭、五月には新屋形の手斧式が行われ、本格的に建設が始められました。

またこの元治元年の一月十一日、敬親は中河原御茶屋において「御具足祝式」という儀式を行います。「御具足祝式」とは甲冑を着用して新年を祝う儀式で、近世初頭までは行われていましたが長い泰平の世にあって廃れていった儀式でした。儀式では藩祖毛利元就・隆元が連署した軍令状の後ろにさりに敬親と世子元徳が連署し、勤王の志を貫徹することを誓っています。「山口移鎮」の後、攘夷決行の代償として手痛い報復攻撃を受け、また八月十八日の政変により京都での実権を失うなど、長州藩はこの時期、非常に厳しい状況に置かれています。こうした状況での「御具足祝式」復活は、新城着工を前にして敬親の覚悟を示すとともに、藩内の団結を促すものでした。

といふて長州藩はさらに窮地に追い込まれます。元治元年七月、京都で禁門の変が起きこれに敗北すると、長州藩は朝敵となり征長の幕令が出されました（第一次長州出兵）。このため八月に新城建設工事が一度中止され、十月には敬親と元徳が萩に帰ります。工事はその後再開され、九月ごろには御屋形書院などが完成していましたようですが、十一月に第一次長州出兵の講和条件の一つとして山口城の破却が提示されましたが。長州藩はすでに九月の段階で藩政の主導権が恭順派に移っており、結果これを受け入れます。

御屋形や石門、城正面の堀、諸閑門が破却され、十二月には征長総督名代がこの破却状況の確認に訪れます。



「山口領之図」（山口市歴史民俗資料館）

右下墨書に征長総督名代が査察に訪れたことが記されている。

儀式で、近世初頭までは行われていましたが長い泰平の世にあって廃れていた儀式でした。儀式では藩祖毛利元就・隆元が連署した軍令状の後ろにさりに敬親と世子元徳が連署し、勤王の志を貫徹することを誓っています。「山口移鎮」の後、攘夷決行の代償として手痛い報復攻撃を受け、また八月十八日の政変により京都での実権を失うなど、長州藩はこの時期、非常に厳しい状況に置かれています。こうした状況での「御具足祝式」復活は、新城着工を前にして敬親の覚悟を示すとともに、藩内の団結を促すものでした。

といふて長州藩はさらに窮地に追い込まれます。元治元年七月、京都で禁門の変が起きこれに敗北すると、長州藩は朝敵となり征長の幕令が出されました（第一次長州出兵）。このため八月に新城建設工事が一度中止され、十月には敬親と元徳が萩に帰ります。工事はその後再開され、九月ごろには御屋形書院などが完成していましたようですが、十一月に第一次長州出兵の講和条件の一つとして山口城の破却が提示されましたが。長州藩はすでに九月の段階で藩政の主導権が恭順派に移っており、結果これを受け入れます。

御屋形や石門、城正面の堀、諸閑門が破却され、十二月には征長総督名代がこの破却状況の確認に訪れます。

その後高杉晋作が功山寺に挙兵して内戦がはじまり、翌慶應元年（一八六五）一月一日には決着して藩譲が「武備恭順」に統一されます。「これを受けて敬親は二月二十七日に再び山口に移り、山口再移鎮が行われました。四月には先に破却された箇所の修築が命令されていました。もっともこの修復では壁や屋根瓦の修築といった最小限の工事にとどまつたようです。また諸役所の移転も漸次行われたようですが、慶應二年（一八六六）六月から始まつた四境戦争の影響などもあってなかなか進まなかつたようです。したがつて実質的には萩と山口の二元的な状態が続いており、こうした中途半端な状況を解消するため、慶應三年（一八六七）二月に山口定住を正式に宣言し、移転作業の促進が図られました。

その後、明治に入った後も諸役所の移転が進められました。明治一年（一八六九）には山口御屋形が山口藩議事館と改称され、翌年に「十朋亭」議事館が藩厅と改称、また藩厅門が再建されました。そして明治四年（一八七一）年、廢藩置県を経て山口藩厅が県庁と改称されました。

（このように）「山口移鎮」はその時の情勢と密接に関係しながら、糾余曲折を経て実行されていきました。

Q 「山口移鎮」当時の山口の状況を教えてください。

江戸時代後期の山口は、萩往還や石州街道が通つてゐることもあり、比較的多くの藩士たちが居住し、またある程度の経済的発展がありました。しかし長らく藩府のあつた萩に比べると、都市規模はそれほど大きなものではありませんでした。したがつて、文久三年七月には萩の有力町人に対して山口に屋敷地を与え、山口の町人と協力して「市中成立」を行うよう命じています。

また萩から移つてくる藩士の居所の確保ということも問題となりました。先にも述べたように諸役所の移転はゆつべつと行われていきましたが、藩主が山口にくる以上、藩首脳陣は必然的に山口での滞在機会が多くなります。

こうした事態に対応するため、山口の町方では「御用宿」として離れ屋敷などを提供しました。

こうした「御用宿」として提供された屋敷の代表例として、下堅小路の「十朋亭」が現存しています。「十朋亭」は醤油業で財を成した萬代家の三代利兵衛英備が享和年間（一八〇一～一八〇四）に建てた離れ座敷で、「山口移鎮」に際して当時の当主である五代利兵衛輔徳がこれを提供しました。この「十朋亭」には周布政之助をはじめ、伊藤博文、井上馨、木戸孝允、久坂玄瑞、山形有朋など、維新期の長州藩を牽引した人物たちが身を寄せています。また禁門の変で久坂とともに挙兵した久留米の眞木和泉など、他藩の志士たちも彼らを訪ねていました。なお

萬代家は藩の財政機関である蔵元役や撫育方の御用達、「山口移鎮」に伴う町奉行所建築の御用達に任命されており、また五代輔徳は山口越荷方会所の会頭を務めていました。この越荷方会所は天保十一年（一八四〇）に下関に設置された長州藩の利殖機関で、慶應二年（一八六六）に山口・萩・三田尻に新たに会所が設けられ、ここから集められた運上銀が軍事資金に充てられました。



「山口越荷方御銀子箱」（山口市歴史民俗資料館）

山口越荷方会所で使用されていた千両箱。

Q 「山口移鎮」は山口にどのような影響を与えたのでしょうか。

藩庁が移つたことにより、幕末期の長州藩の動向は基本的に山口で決定されていくことになります。また明治以降は藩庁がそのまま県庁として使用されることが、各種行政機関が設置され、政治・行政都市として現在に至ります。

ます。

また現在の山口は大学や博物館、美術館などが設置されるなど、文教都市としての性格もあります。例えば、山口では文化十一年（一八一五）上田鳳陽が中河原に私塾山口講堂を開き、既設の武芸稽古場と合わせて文武練磨の道場としていました。その後山口講堂は萩明倫館の直轄となり、また名称を山口講習堂と変えますが、「山口移鎮」を受けて文久三年十一月に山口明倫館と改称されます。山口明倫館では文学寮、兵学寮などが置かれ、特に兵学寮では大村益次郎が洋式兵学を教授し、即戦力となる士官を養成していました。明治に入るといの山口明倫館が山口中学校となり、その後いくつかの変遷を経て現在の山口大学に至ります。

このように「山口移鎮」は、近代以降における山口の都市性格を決定づけの出来事であったと言えるでしょう。



「山口県庁」（山口市歴史民俗資料館）

県庁として使用された旧藩庁の玄関付近
(明治末ごろ)。

〈参考文献〉

桑原邦彦「文久の山口移鎮と山口城に関する諸問題」

（『山口県地方史研究』第九一号、一〇〇四年）
同「山口城の城地選定と対幕府折衝について」

（『山口県地方史研究』第九四号、一〇〇五年）
同「山口城の絵図・差図と縄張りについて」

（『山口県地方史研究』第九五号、一〇〇六年）
同「山口御壁形（山口城）の築造年代と縄張り」

（『山口県地方史研究』第一〇五号、一〇一一年）
山口市編『山口市史 史料編 近世II』（一〇一三年）

〈お詫び〉

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、

県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ（「維新史回廊だより」で検索）で御覧いただけます。次号は来年3月発行の予定です。どうぞ御期待ください。

維新史回廊だよりは、県内各市町の文化振興担当課や博物館・資料館、
県政資料館に置いています。既刊号は、維新史回廊ホームページ（「維新史
回廊だより」で検索）で御覧いただけます。次号は来年3月発行の予定で
す。どうぞ御期待ください。